

中山寺蔵草稿に基づく大円宝鑑国師愚堂和尚語録

(上)

木村俊彦

始めに

筆者は嘗て三重県伊勢市勢田町の中山寺さんより大円宝鑑国師語録の雪潭和尚による草稿の撮影を御許可頂き、岐阜県八百津町の大仙寺さんからは大円宝鑑国師年譜写本を複写させて頂いて、それらの研究成果を『訓読本愚堂録・愚堂年譜』（世界聖典刊行協会）として平成十年に上梓した。その後、仙台市青葉区北山の覚範寺さんより『虎哉録―斑寅集―』の上梓を任されたのを機会に、愚堂録についても原文の編集を改めて心懸けた。当時草稿は全くメモの集成のままであったが、寛政九年に大仙寺の祖寧和尚が十九門三巻本にして『宝鑑録』として版行した。しかし四住正法山語は関山国師三百年忌香語が正しい（雪潭は「本有円成国師三百年忌拈香」としている）など編集に若干の疑問があり、書簡や雪潭序が省かれていたこと、至道庵主への重要な印記も単なる偈頌になつていたりするので、若干の字の訂正と共に訓読本に際して再編集した。今この機会にもう一度写真のみから掘り起こし、故・平野宗浄老師に言われていた原文の再生を心掛けた。全体の構成は訓読本のままである。

祖寧版で貴重だった後西天皇の宸翰に比し後水尾上皇の院宣は誤まりである。祖寧和尚はこれを巻首として再住正法山妙心寺語、三住正法山妙心寺語、四住正法山妙心寺語、正法山入牌祖堂語、点眼、賛辞、自賛、道号、仏事、禁中入室語、対御、偈頌、法語、銘詞、薦拔、雑著、薦亡、行録、伝記、（祖寧）跋としたが、これを、

雪潭序、再住正法山妙心禪寺語録、三住正法山妙心禪寺語録、禁中入室語録、道号記、印可証明、贊詞、拈香語、偈頌・詩聯、下火・掩土・薦拔・預修・示人、立地・雜著・書簡の十門に整理した。この門名は多く雪潭の命名に由来する。「仏事門」は「拈香語」とした。行録と伝記は勿論その完成版である「大円宝鑑国師年譜」に譲れば良く、訓読本を参照されたい。

旧字体は現代字に置き換え(写本で既に「竜」や「岩」を使っている)、詩偈や端的の語ではない漢文の箇処は句読点を置いて読み易くし、「峯」「畧」の様な異体字は残した。訓読は訓読本に譲るが、そこに欠いた雪潭序のみ訓読を加えた。これは甚だ難しく、野口善敬師の御世話になり、敦く御礼申し上げます。また語録の資料を開示して頂いた中山寺さんと年譜の資料を提供して戴いた大仙寺さんに、改めて篤くお礼申し上げます。

尚、勅宣に加えて院宣と称した草書体の書簡が祖寧版に覆刻されているが、私が改めて解読した所、御水尾院の秘書役・中院亜相(大納言)通茂卿の書簡であることが判つた。「愚堂和尚国師号之事、不可有別条之間、勅書草内々耳有用意之由。院御氣色袴(うるわしき)也。三月三日(花押) 通茂 花山寺雷峯座元」というもので、勅宣は後西天皇の時に発布された。国師が晩年に説諭した人として、年譜の万治元年の項に出てくる人である。本録には通茂書簡は載せず、ここに記しておく。花押は「茂」の字を崩したものである。

草稿に忠実にする為、「掉」を「卓」、「這箇」を「者箇」にする様な当て字の慣例化が見られるものはそれに従い、編者・雪潭の朱筆補正は本文に加えた。よく同種の記録が前後に二種、甲稿と乙稿があり、例えば三住妙心語は項目を掲げて甲稿が判り易く、乙稿は補充が丹念だ。二種の草稿は他にも見られる。重複する場合は両稿を校合し、合採した。尚、敬意を示す為に一字空けたり改行したりする習慣(欠字・平出)が当時あり、本版はそれを踏襲している。小字二行の間註は丸括弧で組んだ。筆者が撮影させて頂いた駒には特に印可証明が異常に少なく、撮影漏れもある。賛や道号も六割位に留まっていたが、書簡は幸いに数通書写されたものがあって、

祖寧版に加えることができた。祖寧版は草稿に較べると奥書きなどを省いていることがよくあるので、その辺の掘り起こしも本稿のメリットになっている。当て字の酷いものは角括弧で補正した。

註 『訓読本』は日本文化専攻学生のための「東洋思想研究」の講読本とする為に編集したもので、そのような教科書版になっている。その点は妙心寺派教学の恰好の教材になっている。『虎哉録―斑寅集―』（木耳社、昨年十一月三日発行）は既に編集済みのもの（覚範寺蔵版）を刊行するだけだったから、本題のような苦勞はなかった。尚、原文でも読み易くする為に、本稿でも後者と同じく句読点を置き、段落を工夫した。

大円宝鑑国師愚堂和尚語録

目次

- 中山宝鑑国師愚堂和尚語録序〔雪潭序〕
- 一、再住正法山妙心禪寺語録
- 二、三住正法山妙心禪寺語録
- 三、禁中入室語録
- 四、道号記
- 五、印可証明
- 六、贊詞
- 七、拈香語
- 八、偈頌・詩聯
- 九、下火・掩土・薦拔・預修・示人

十、立地・雑著・書簡

付録、後西天皇国師号勅旨

中山宝鑑国師愚堂和尚語録序〔雪潭序〕

或人謂予曰、汝侍国師也年尚矣、曷不採録師之語句。予曰、竊願、有夫博聞強記而振大手筆之輩、視之笑言、才乏文拙、無乃贖人之嘲、還揚家醜歟。曰不然、儒猶所謂以立意為宗、不以能文為本、而矧宗門以不立文字、豈不宗猷耶。然道卓爾獨不著焉、以故只要須借言借字、不即文不離文而道行乎。其中矣。噫、翫弄文章巧拙者、苟不近尔道与本則孰泥殺青邪。蓋惟、自中葉以降、致有俾秀儒秀教熟文熟詩之人、往々相共婦依我門者甚夥矣哉。因所以厥秀熟之習弄成仏事也。倘論朴実文花云乎。尚或笑之謂之、不笑非道。便至師之片言隻字亦是吐演道之朴実耳。為執道而不執言者盍集焉。予唯々編輯平日所聞見之大較。唯恐甚多疎畧、或有抵牾。庶兄弟賢者訂正焉、増補焉。

寛文乙巳孟冬吉辰、嗣法小師（宗瑞）拜書于神護峰中山寺。

〔書き下し文〕

中山宝鑑国師愚堂和尚語録序〔雪潭序〕

或る人、予に謂いて曰く、「汝国師に侍すること也た年尚し。曷ぞ師の語句を採録せざるや」と。予曰く、「竊かに顧りみるに、夫れ伝聞強記にして大手筆を振うの輩有りて之を視て笑いて言く、『才乏しく文拙ければ乃ち人の嘲けりを贖なう無し』と。還つて家醜を揚ぐるの匹いか」と。曰く、「然らず。儒すら猶謂ゆる意を立つ

るを以つて宗と爲し、能文を以つて本と爲さず。而るを矧んや宗門は不立文字を以つて豈、猷を宗とせざらんや。然れども道は卓爾として独り著れず。故を以つて只だ言を借り字を借り、文に即かず文を離れずして、道其の中に行われるを要須す。噫、文章の巧拙を玩弄する者、苟りそめにも道と本とに近からずんば、則ち孰れか殺青に泥まんや。蓋し惟うに中葉より以降、秀儒秀教・熟詩熟文の人をして往々相共に我が門に帰依せしめる者甚だ夥しき哉。所以に厥の秀熟する所以の習いに因りて仏事を弄成する也。倘し朴実を論ぜば文花と云わんか。尚、或いは之を笑ひ之を誚するも『道に非ず』とは笑わざらん。便ち師の片言隻字に至るまで亦た是れ道を吐演するの朴実なるのみ。道を執りて言を執らざる者の為に盍集せよ」と。予は唯々として平日聞見する所の大較を編輯す。唯恐らくは甚だ疎畧多く或いは抵牾有らん。庶くは兄弟賢者、焉を訂正し焉を増補せんことを。

寛文乙巳〔五年〕孟冬〔十月〕の吉ぎ辰、嗣法小師（宗瑞）神護峰中山寺にて拜書す。

一、再住正法山妙心禪寺語録

侍者豊玉 編

師、在濃東和知正伝寺、受山門請。寛永十二乙亥年臘月二十四日入寺。

〔祝聖〕

歳旦上堂云、大日本国山城州平安城正法山妙心禪寺住持伝法沙門東寔、改旦令辰謹焚宝香端為祝延

今上皇帝聖躬万歳々々万々歳。陛下恭惟、以武王為子、聖德遍乾坤、以成王為孫、叡算齊天地。（竖起扨子云）

二氣洪鈞、万物咸新。若有探花客入得少林春。有麼。（無向禪）乃云、妙在一漚先、海口莫能宣。仏法新年何免

言宣。臘尽春回、鶯出幽谷。水消雪解、魚踊深淵。頭々当々頭露、物々処々現前。卍字老人付属正法於葉婆。

可謂遲八刻。欠齒道士開示密旨於可祖。不直半文錢。不待仏々授手、不仮祖々相伝。智照神光亘今亘古。惠日

心月輝地輝天。此故君々臣々、君臣慶會。父々子々、父子安全。自然天道与人道冥合。王風与祖風永扇。

(卓拄杖曰)適來白頭翁許多言說、諸人還委麼。欲識仏性義理、當觀時節因緣。

自叙。至愚極陋、老倒疎慵。慚汗々々。

謝語。上堂之次共(恭)惟、四派之各々諸位堂頭大和尚、四水正宗。人々狀元、及第一方化主。各々到处稱尊。

次惟、山門兩序一会海衆、單寮蒙堂諸位禪師、童子鳳孫、刷羽文淵。掣角法窟、梅兄菊弟。深根祖庭、固帶禪林。

(拈拄杖曰)記得。橫川洪和尚、歲旦上堂云、旧年說話新年說話、一法從万法生、万法無一法実矣。橫川与麼說話、事理已分明。山僧新年不要說話。何故。時節既到其理自彰。且自彰底一句作麼生拈揚。

(卓拄杖一下曰)官梅翻粉發清香。御柳搖金抽淺黃。品物春來漏消息。更無一法可商量。

久立珍重。下座。

結制上堂曰、大日本国平安城正法山妙心禪寺住持伝法沙門東寔結制令辰、謹焚宝香端為祝延

今上皇帝聖躬万歳々々万々歳。陛下恭惟、德出則天后上、化及万方、功超女禍氏前、寿保億劫。

(橫拈拄子云)安居結制如免触株。護生禁足似鳥栖芦。還有出格生涯也無。(無禪客、乃豎起拄子云)十方薄伽

梵一路涅槃門。天寬地闊。返本還源、直得不動一步周遊法界、不發一氣、充塞乾坤。塵々円覺伽藍、行住坐臥

不動不靜。処々平等性智。周旋俯仰、常泯常存。或処山林、居樹下。或行荒草、入深村。(拈拄杖画一画云)元

來遊戲神通、折拄杖七尺八尺、信手執捉。直下全体作用。破草鞋一片兩片、信足運奔。更說什麼靜処鬧処。又

說什麼有言無言。者箇是衲僧家尋常受用底之三昧、倒用橫施着々有出身之路。何更桎梏籠檻、為淺(賤)丈夫哉。

雖然恁麼、山僧今月要令汝諸人向二千年前影子裏、度一夏九十日之晨昏。正与麼時作麼生平反。

春來秋去年々事。不信靈山問世尊。

自叙云。空裏談空、妄談不少。夢中說夢、胡說惟多。伏丐賜恕宥。

謝詞云。上堂之次恭惟、桂昌堂頭大和尚(宙外)、空門品貴、仰之弥高。叢林于曇、希有難思。智勝和上(单伝)古仏趙州。双花甲子、真人臨濟、五家棟梁。光国和上(梁南)禪中有詩、超宗越格。句中有眼、照古鑑今。鳳台和上(輝岳)鳳台鳳集、現瑞彰祥。竜淵竜翔、拏雲攫霧。玉竜和上(恵山)大川法道、九哲一糸。四海名流、同宗万派。養徳和上(周室)養徳養賢、如玉温潤。離名離相、似鏡長明。竜安和上(伯蒲)北山穿雲、義天朗耀。西源湛月、靈光分明。正眼和上(龜鑑)正眼、大明無私。権興法源、一漚未発。西河和上(義田)西河獅子、凜々威風。東海鳳凰、騰々瑞氣。蟠桃和上(一亩)七生知識、道高德高。一代風流、禪熟詩熟。海福和上(快室)倒五位旗、不墮妙窟。披三玄甲、別立生涯。大通和上(湘南)南岳磨甑、作大円鏡。西江吸水、当小団茶。春光和上(猷山)徳色道香、春光爛漫。妙源靈派、碧潭澄清。靈雲和上不疑靈雲、一見眼活。再參百丈、三日耳聾。雜花和上(月漢)開雜花界、莊嚴法幢。坐独秀峰、建立宗旨。後園和上(千英)鋤後園草、示麻谷禪。題前村梅、得齊己句。龜仙和上(石天)鍊石補天、神仙秘訣。挾山超海、衲僧生涯。前板座元禪師後板座元禪師居第一座、共扶化儀。入不二門、全具大智。東西兩序大小二空諸位禪師鷲序駕班、威儀具足。鸞翔鳳舞、羽翼已成。一会海衆諸位禪師、黄檗一千猶較此子、黄梅七百總立下風。

(豎起拈子云)拳。雪峰領衆到浮江。乃向云、欲寄二百僧過夏。得否。浮江以拄杖画一画云、着不得。息耕老師拈云、奸峭互陳。对面千里。有人寄僧過夏南山、大開東閣。何故。彼此出家兒。山僧這裏便不然。有人寄僧過夏、但令彼荷水搬柴。何故。一日不作、一日不食。久立珍重。下座。

結制上堂云、大日本国山城州平安城正法山妙心禪寺住持伝法沙門東寔結制令辰、謹焚宝香端為祝延今上皇帝聖躬万歳々々万々歳。陛下恭惟、莅政簾帷大盛三代礼案、出言糸紵普正万国衣冠。(紵敷勿切緇衣、王言如綸其出如紵、広韻大索)

(拈拈子云)用尽釣竿手、待衝浪金鱗。更無貪餌蜺、懶自卷糸綸。即今還有衝浪金鱗麼。參。乃云、二千五百

年前梧葉翻黃、芦花飛白。二千五百年後芦花飛白、梧葉翻黃。刹々塵々豁開本來面目、在々処々露出本地風光。到這裡三月、安居制已滿、九旬禁足功全彰。正与麼時、自恣自在一句作麼生宣揚。

東西南北無門戶 大地山河不覆藏

自叙云(東寔)、毀犯戒律、脫畧規繩。伏乞恕亮。

謝詞云、上堂之次恭惟、四派之各々諸位堂頭大和尚、人々千仏一數、箇々三界最尊。誰不敢瞻仰哉。次惟山門兩序一会海衆・單寮蒙堂諸位禪師、簷蔔叢中簷蔔、栴檀林裏栴檀。必無雜樹者乎。

(拈拄杖曰)記得。松源禪師解夏上堂云、虎丘一夏与兄弟說話。管取生身陷地獄矣。正法一夏不与兄弟說話。又不管取生身陷地獄。即今正当解制之日、幸臨退院之辰。聊述一偈、留別滿堂之電象衆去。

住山期滿欲帰郷 榔標橫担辞法堂 道義相扶諸老宿 宗盟他日可難忘
久立珍重。下座。

二、三住正法山妙心禪寺語録

侍者 編

師在濃東細目郷大仙寺、受山門請入寺。維持寛永二十癸未年十月朔日也。

祝聖

正旦上堂云、大日本国山城州平安城正法山妙心禪寺住持伝法沙門東寔、改旦令辰謹焚宝香端為祝延。今上皇帝聖躬万歳々々万々歳。陛下恭惟、徳越百王君、普為生靈衣被、寿超百億劫、永為仏法莊嚴。(索語。拈拄子云)仏法元来無両般。莫論易々与難々。既然今日達新歳、不涉二途。試道。看。

提綱

(拈一抔云)天地何言、已回木德。欲建法幢、不宜一默。昨日旧歲臘雪連天、今日新年春風遍野。一天和氣悉滿山川、万里祥光漸浮江海。処々笑歌盈耳、人々喜色盈眸。尽法界尽虚空好因緣好時節。乃見陰翳消散、千草万木發輝。陽德流行、伏介潛鱗啓蟄。物々得其所、頭々遇其時。已是明々百匝千重、一々七竅八穴。更說什麼密參密授。又論什麼秘訣秘伝。雖然不因造化功、不假陰陽力。心時心節一句作麼生道。

(拈拄杖卓一下云)兔角杖辺疎影動 龜毛拈頭暗香浮

自叙云、東窠兀々癡々、不知足所踏。默々昧々、不知言所宣。慚汗々々。

謝語云、上堂之次恭惟、四派下諸位堂頭大和尚、獅嘯象顧、非狐兔所能。虎踞竜蟠、非蛇鼠所及。瞻之仰之。次惟、山門兩序一会海衆・单寮蒙堂諸位禪師、十方聚會、不異靈山。三拝慇懃、如同少室。將謂、為道義不爭人我。畢竟以宗盟不論自他。感荷々々。

拈提

(拈拈子云)記得。虚堂老師正旦上堂云、年々是好年、日々是好日。為甚有新有旧。若道得箇隔手句子、許汝鉄輪峯頂上翹足、大洋海底算沙。不然野火燒不尽、春風吹又生。妙心則不然。若道得箇隔手句子、許汝鉄輪峯頂算沙、大洋海底翹足。久立珍重。下座。

(拈一抔云)山川草木自称臣 雨露恩榮与歲新 千紫万紅增瑞彩 花王即位洛陽春

結制上堂云、大日本国山城州平安城正法山妙心禪寺住持伝法沙門東寔結制令辰、謹焚宝香端為祝延今上皇帝聖躬万歳々々万々歳。陛下恭惟、普天之下普撫育万民、永劫間永擁衛三宝。

索語

(拈拈子云)麦秋槐夏、氣爽風清。燕語蟬噪自事護生。諸禪德作麼生護生。參。

提綱

(弘一弘乃云)烏兔急速、聖制既望。有條攀條、無條攀例。既是有條有例、豈得無証無修。任地木匠帶枷。況復桑蠶繸繭。若是衲僧分上、不妨別有生涯。仏界魔宮此邦他土、總是円覺伽藍。醜鷄蠹蠹、蠢動含靈、無不平等性智。処々塵々三昧、万処無中。塵々処々円通、一塵無外。此故非高非低、非大非小。或入蛸螟眼裏、向須弥頂上坐。或入藕絲窠裏、跨大鵬背上行。要行便行、要坐便坐。是非神通妙用、又非本体如然。要用便用。更說什麼三月安居。又論什麼九旬禁足。山僧与麼告報、未出真俗凡聖。畢竟如何受用去。

(卓拄杖云)自携瓶去沽村酒 却着衫來作主人

自叙

金鑰不弁、玉石不分。錯鼓昏皮、乱呈幪袋。伏乞賜恕宥。

謝語

上堂之次恭惟、四派下諸位堂頭大和尚、竜象蹴踏、鸞鳳翱翔。非跛驢所堪、非凡鳥所及。嗚呼、誰敢不瞻仰哉。次惟、山門兩序一会海衆諸位禪師、獅子窟中獅子兒、梅檀林中梅檀樹。香風薰徹、威風凜然。奇哉快哉。

拈提

(拈拄杖云)拳。虚堂老師結夏小參僧問。布袋長年鬧市、觀音終日魚籃。禁足安居當箇何事。老師云、擊筒方木響。僧云、与麼則深密処、足可觀光。老師云、差之毫釐。僧云、和尚答処辛辣、学人如何溲泊。老師云、向無溲泊処領取。老師昔日橫談豎說、紅挨綠拶。是則是、但是末後一句。為慈悲故、漏逗不少。有人、若向妙心道和尚答処辛辣、学人如何溲泊、但向渠道。且坐喫茶。正与麼時、不立巖嶮、又不漏逗。但令渠自然洒洒落落地。且道、什麼処洒洒落落地処。(靠拄杖云)久立珍重。下座。

祝聖

解夏上堂。登須弥座、立拈弁香云。大日本国山城州平安城正法山妙心禪寺住持伝法沙門東寔、解制令辰謹焚宝香端為祝延

今上皇帝聖躬万歳々々万々歳。陛下恭惟、徳相永超三際、恩光遍照十方。

索語

祝聖了登座、整衣拈扠子云。檀花凝露、芦葉捲風。若還會得、任向西東。

提綱

(乃拈拄杖云)長期短期日上下、結制解制物換星移。安居功成、自恣日至。諸禪徳欲向什麼處去。還記得來時路麼。

(以拄杖画一画云)還會麼。其或未然、

秋風吹渭水 落葉滿長安

自叙

年老心孤、身貧智短。

謝語

上堂之次恭惟、山中諸大和尚人々当陽、直指熱瞞為仰工夫。各々觀面商量、冷笑曹洞玄妙。次惟、山門兩序一会海衆諸位禪師、將謂、作家禪客。元來靈利衲僧。

拈提

(拈拄杖云)息耕老師解夏小參云、靈山結夏、結本不曾結。興聖解夏、解亦不曾解。解結既無拘、去來無作相。正法門下別不用結解之二字。何故。時節已至、其理自彰。更賦一偈、辞大衆。

年々改換往來人 何事三回預厥倫 頂上鉄枷今日脱 山林城市自由身

久立珍重。(乃下座。三擊退鼓、自担拄杖直出法堂、到山門頭辞大衆去)

註 三住妙心語は原稿に二種あり、我々は始めにあるものを甲稿、後にあるものを乙稿と仮に呼ぶ。始めのものが初住語であ

れば良かったのであるが、遺憾にしてそれは見当たらず、祖單版にもない。甲稿には朱書で雪潭が「宝鑑國師三住」と添えており、「祝聖」「提綱」などの見出しがあるのに対して乙稿は「正旦上堂云」などの「書き」になっている。本稿では両方を採用し、乙稿の「書き」は括弧に括った。また乙稿は達磨忌などの語もそこに加えているが、甲稿によつて上堂語のみにし、後者は八、偈頌・詩聯に纏める。再住妙心語には「拈提」の見出しがない。

三、禁中入室語

師於禁中入室之語録

大衆集定。師進達磨前而焼香三拜了而登椅子。侍者（瑞南）即進師前而取竹篋而按目前云、這箇有竜王多少風。不即此用、不離此用、請和尚撰取群機。師接竹篋而打侍者云、忙中參得竹篋禪。乃（師唱本則）云、記得。天親菩薩從弥勒内宮下。無着菩薩問、經云、人間四百年彼天一晝夜。弥勒於一時中成就五百億天子、証無生法忍。未審說甚麼法。天親云、祇說這箇法。祇是梵音清雅、令人樂聞。後來天衣懷云、弥勒已是錯說。天親已是錯伝山僧。今日將錯就錯、与爾諸人註破。良久云、諦聽々々。向下文長、付在來日。師（唱本則了便）云、雖我宗無語又無一法与人、事不得已、為許入室。問話者入來。

時學者焼香三拜了而進師前。師將竹篋仰案問云、天親云、祇說這箇法。如何是這箇法。（至下不録答話、只學初問）又云、天上弥勒祇說這箇法。鬧市裡弥勒說那箇法。又云、三界無法、喚什麼作這箇法。又云、梵音清雅。即今樂聞否。又云、人々尽有這箇。是爾護惜也無。又云、天上人間日月有長短。這箇却有長短麼。又云、十方世界何處無這箇法。又云、弥勒未說天親未伝時如何。又云、捧下無生忍却假修証也無。又云、尽大地是這箇。商量

箇什麼。學者問答了後、侍者進師前。問云、上來旧公案且置。家國興盛一句作麼生。侍者答云、鳳凰呈祥、麒麟現瑞、發起西來祖意。師云、万歳々々。至祝々々。云了便下座。

是年寛永十一年〔正保二年〕四月十三日也。四月十五日自天子賜師唐織袈裟一領以表觀儀矣。

〔斯時師住妙心、妙心參 内、廻於清涼殿（或人云、於仙洞後水尾院）。西掛達磨像（大通院什物、含輝之筆）案上安香炉。東立椅子、机上置香炉并竹篋。当師之椅子後面垂 御簾、設 天子・仙洞・国母御座。竜天・洲室侍師左右、執介抱之役。侍者瑞南、學者桂南・愚丘・林谿・実堂・了溪・頸州・潤州・水南・黙翁・香林・禿翁・千山、都十二人也。当殿東 親王・門跡・諸公卿等列坐、殿西有諸殿上人等。南縁聯居大徳・妙心・諸五山之衆。兼又諸緇素併肩交眉、共聚會。御庭沙上諸士庶人等着礼服而群集、滿天門内也。是年実寛永十二〔正保二〕年四月十三日也。同月十五日 勅使中院通村卿 詔 叡感有余之旨、乃賜師唐織袈裟等。今鎮東濃大仙。〕

註 禁中人室語は甲・乙二稿あるが、基本的に相違はない。ただ乙稿は角括弧内の説明を付加しており、甲稿末の「是年」云々をその末尾に回している。甲稿の「寛永十一年」、乙稿の「寛永十二年」は誤まり。

四、道号記

至道無難(号)

三祖著銘呼信心 唯嫌揀択古猶今 渠儂行底与他異 山是自高水自深

非心道是(号、俗名杉田主水・越前宰相家臣)

居士全機是非外 心空及第古猶今 勝他龐老曾無後 却有兒孫孝義深
誰道三星繞月宮 字形何敢表真空 不知不会忘機坐 落木声寒残夜風
右、杉田氏三正老人於一大事因緣發大疑團、凡四十余年也。末後就予扣問、頓呈一偈。實愜老僧之意。仍諱
之曰道是、字之曰非心居士。乃書二大字贈之。且用居士之韻賦一偈繫其下、以為之証云爾。慶安戊子小春吉辰。

錐翁(号)

寸鉄鑄成炉鞴処 工夫豈在鑿頭方 雖然未費鉗鎚力 千万人中独脱囊

達閑(号)

鉄壁鉄門千万重 針鋒毫末不相容 私通車馬好時節 八字打開起祖宗

崇山(号)

聳出薄雲輕霧間 攀蘿欲上往如還 攢峰峭壁知多少 一鳥不啼山更閑

默隱(号)

維摩丈室 澗明三徑 若涉言詮 秋菊飄零

越溪(号、俗号毛受太郎右衛門、越前家臣也)

范蠡功成存勝負 公耽山水有誰爭 蛮烟深处無人到 枯木岩前啄木声

藍室（長香院永薰大姉号）

芳叢時有秀 蓮菊自成隣 猶与梅花約 一堂秋又春

心安（号）

利鎖名纒都脱却 水辺林下事閑遊 時人不識此真楽 来往風塵空白頭

二白（号）

南村梅北村雪 此景当教人骨清 昨夜江湖成一片 難分疎影与輕明

虚室（号）

六窓寂寞自無塵 緑竹青松掩四隣 借得清風充洒掃 機前朝暮不勞人

仙苑（法林院殿寿信大姉号也、石川主殿頭夫人）

緑蘿鬱々千林茂 芳草青々一洞幽 到者精神自明潔 不知方外有丹丘

冬嶺（号）

何処孤峯還不白 千山万岳雪皚々 層嶺高聳鳥飛断 只有寒雲自去来

閑室（号）

檐間寂寞 窗外風清 安眠高臥 勝毘耶城

閑極（信首座号）

青山捫虱立 綠水对花眠 日々空過日 年々不記年

為如默首座賦雷峰之号

忽然雲起碧崔嵬 驀走金蛇激雷來 四面山高頻發動 当知蟄戶一時開

雷峰（号）

忽然雲起峩眉頂 一夜乾坤撥亂來 疑是山巔崩倒去 曉天依旧碧崔嵬

為宗悟首座賦大疑之号

此事元來非小事 幾年起坐掛心頭 一千七百伝灯祖 自始是誰即便休

月窓說

友心老人請別号。書上之二字贈之。蓋取義於心月孤円光含万象之句者也。承応甲午暮春吉辰。

大心号記

士等首座与予結交者年尚矣。一日來謂予曰、曾湖南大禪師為我安字稱曰大心。其後禪師移法旆於中国。故不

聞其說。願令為我記之。予曰、這箇是千仏所護念、万祖所修行。豈舌頭而演之哉。首座曰、為三界導師無一語為人安得利生。予於是不獲已述一偈、以梗其語云、

有物分明法界通 那辺這裏一如同 胸中天地莫言窄 千古三星繞月宮
慶長二十年蒼竜乙卯孟夏吉日、関山十四世之孫・愚堂叟詰之。

梅天(道乾〔無明〕之号、俗名・須田弥左衛門、松平市正家臣)

香郁一枝自然別 氷肌玉骨色還鮮 此兄何得有人世 料識青霄都卒辺

桂林(号)

度会貞昌公世々為神職代々称上部越中。專雖從事神靈、而又帰依仏法者也。一日就予需別号。書桂林之二大字贈之。且祝遠大以一偈云、

閑田誰把兩株種 樹影婆娑高発香 葉々枝々繁茂処 森々老翠与新黄
承応歲癸巳仲春如意珠日

俊嶺(号、谷内蔵助)

谷倉部員外郎源衛之、称宗均居士。就山僧向扣大事者有年矣。一日需別号。号之曰俊嶺。乃賦一偈以為証云爾。
料識崎嶇行路難 峻々高聳碧層巒 千秋白雪不消尽 多少令人毛骨寒

藍英(禪尼)

上部越州刺史度會貞昌公為慈母求法諱道稱。諱之曰祖秀、字之曰藍英。蓋藍之為物也千草叢中尤俊秀者也。故夏與秋者以菊與蓮為友、冬與春者專以梅為友焉。顏色馨香逐四時不變者藍也。故古句所謂蓮菊梅藍共一堂。此故号曰藍英。乃書二大字以贈之。賦以偈曰、

此花雪後盛開辰 梅蕊經寒正好親 籬菊池蓮猶善友 番々香郁四時春
承庇歲癸巳仲春如意珠日

湖光

右金吾中西氏與三信士者世々為宗門檀越。就余剃髮染衣、授以沙彌戒。其志如法。諱之以宗証、且書湖光之二大字、以為之字。系以拙偈曰、

水自映天々映水 水天一色杳無邊 明々千古永明旨 片月波心宗鏡円

五、印可証明

付与某禪者（密雲座元）

某禪者早処道宣律師之末流、究毘尼者年久矣。晚入禪門、忽打破漆桶、自誇見解。由是雖勘破諸知識、而以無愜意者、閑居過日者亦數年。一日被吹業風入老僧門來、隨衆多住。雖然不知老僧有陷人坑子。不覺沒溺深坑、不得復去、快到休歇田地也。祝々。書以為証云爾。

明曆歲之丁酉孟夏吉辰

六、贊詞

臨濟贊

這瘋癲漢酷振威烈。熱喝山崩、頤拳石裂。

達磨贊（重陽日題）

改姓曾稱陶達磨 化緣已盡獨西歸 今還欲採單伝菊 不覺秋香滿我衣

贊出山釈迦図

昔日逾城何所望 竟平六国護心王 功成不処出山去 可惜夷齊終首陽

臨濟大師贊

黃檗山頭栽春種 高安灘口事秋成 從前辛苦不輕用 尽力收帰積滿楹

贊跨驢布袋像

晨混長汀市 暮帰兜卒郷 往来知幾度 驢背对斜陽

覺印和尚写照贊

梵苑師範、叢林老成。法則依倚趙老、規模彷彿海兄。赴建立門、徧梵刹於武野、設同聚會、延衲子於江城。尽折

邪見、遍救迷情。何人不聞妙音希声。鼓没弦琴、吹無孔笛。是誰不得法喜禪悅。炊鉄釘飯、煮木札羹。使末世下衰法全盛、俾當時必死病能生。道高德高、一衆悉蒙巨益。禪熟詩熟、諸方遍伝芳名。聊加贊美、以尽敬誠。

子葉孫枝繁茂処 江南花木四時榮

右、禪岩座元繪海禪開山覺印和尚真相、属余見需贊。不獲拒辭、漫綴俚言、以応其命云爾。慶安戊子仲冬初五日。

雪窓和尚贊

生鉄面目、金剛眼睛。横説豎説逆行順行。在雲岩研究己事恰三年、万縁俱謝〔捨〕。因法山長養聖胎凡幾歲。大器晚成。憐後学不達本性、愍初機不出常情。開方便門、有志建立宗旨。応慈悲境、不倦引接衆頁、專化儀也。道場鼓浸曉響、盛礼楽也。豊嶺鐘經霜鳴。或時登禪牀、講惠能檀經、禪者未信。或時入律寺談惠照語録、律師乍驚。但事無事、要平不平。氣吞諸方、不妨欺胡謾漢。化行当世、豈忘利物度生。領世尊拈花之旨、被天子賜紫之榮。靈雲桃花、眼界春暖、多福叢竹氣宇風清。定中矚角太原老。笑殺諸人認得声。

右、禪悅首座絵 先師雪窓和尚真、請贊。余与雪窓有素義、亦不可拒、仍応其命。慶安四年卯年。

贊大癩和尚肖像

昔年与我旧同参 今日掛真如对談 祝讚子孫枝葉長。枝橙西北葉東南

大中臣氏孤雲以閑居士肖像、孝子請讚。承応壬辰之冬。

眼空万世、眉聳千山。窺維摩丈室、弄龐老機関。勝游迷悟之外、寧処聖凡之間。要觀居士真蹤跡、

一片孤雲獨以閑

自贊

俊嶺居士繪予幻質、請贊。

雖然勿一箇形段 巧着丹青堪像真。若不因檀越余力 孤貧何以解分身 承庇癸未孟春日。

友我道者、繪千英和尚真、請贊。

千英和尚是余師叔。不獲拒辭、賦小伽陀一章、庇其命云爾。承庇甲午臘朔。

曾領法山兩三次 拈鎚豎弘振宗綱 丹青妙手雖然巧 難画德光与道光

嫩桂和尚贊

繪師々々、渠是阿誰。咦。將謂少林真種草。看来和尚木犀枝。咄。

三住妙心嫩桂宗維贊、法類愚堂書。

自贊 崇山請

諸相非相 非身大身 丹青妙手 弄化作真

濃西不破郡居益鄉諸檀越、繪予幻質請讚。(九月)

法身無相、何用真偽。強着五彩、特覓贊詞。咦。看々、般若真如躰。翠竹黃花秋一籬。咄。

道富居士繪予幻質、請讚。信筆贈之云爾。

暮雲一片、是我身形。咦。富嫌千口少、任他着丹青。咄。

慶安己丑季秋月、前法山愚堂書。

如默禪人繪予幻質請贊。仍賦一偈応其求云爾。承応甲午仲春。

強將幻質画為図 対面分明作兩軀 我道縱雖千万箇 有形畢竟不如無 咄。

七、拈香語〔仏事門〕

前住当山天秀和尚大禪師祖堂入牌之法語（龜年国師之孫、直指和尚之嗣、衡梅之塔主）

〔拈牌云〕天才高秀絶凡倫。身後高名誰要論。雪竹霜松常住相。歲寒不減旧精神。夫以前住当山天秀和尚大禪師古德風致、優曇道人、洛陽朱象。事比屋牡丹富、洛陽言說成踞地獅子嘖。機鋒峭峻、不立得失。喝雷霹靂、何涉疎親。自適曠然、滅却臨濟正法眼藏。雄音絶唱、撥揮雲門新定機輪。拋祖室則揮篋鞭接竜象、登禪床則拈杖釘出麒麟。明頭來暗頭來、照用齊行。耳根淨眼根淨、見聞離塵。者箇是天秀和尚平生受用不底活三昧也。即今别有安牌底一句、諸人却要聽麼。未免尽情具陳去。

〔拈牌云〕潭北湘南雲散尽 孤円心月照天真 喝一喝。

蒲澗和尚入祖堂之法語

空門品貴老禪翁、已墜宗綱古梵宮。忌景三周春色別、梨花白矣杏花紅。夫惟、前往当山第二百二十七世蒲澗陳和尚大師師先賢模範、古德家風。依倚編蒲米山老、彷彿採葉善財童。是文殊非文殊、勉々全身、豈立知解。上勅勒下彌勒、人々具足、何用勲功。不待現三頭六臂、直下証三明六通。正法眼見徹群邪、我見人見衆生見。本来心空、尽諸有。内空外空畢竟空。絕纖埃於曹溪鏡裏、迎素月於虛白堂中。定惠円明、浩渺四溟々々浩渺。自性清淨、玲瓏八面々々玲瓏。到者裏躍倒凡聖窩窟、掀翻真俗羅籠。此故無得無失、無始無終。如上草索子且措。向上別有安牌底之一着子。山僧直下誘衷去。

到得歸家穩坐 金剛圈栗棘蓬 喝一喝。

当山第一座碧潭座元禪師入牌祖堂之香語

恭惟碧潭座元禪師無法為法、不伝為伝。早不顧危亡、投入虎穴。晚來弄殺活、磨壘龍泉。一旦一別三十二年。今茲寬永甲申（正保元年也、寬永二十一年改元）五月二十五日、乃是禪師三十三回忌之辰。於是受業弟子春光主盟猷山大和尚就于当山入牌祖堂。殊揮金弁襯拜屈山中諸老宿、敦請滿山清淨衆。諷經一上之次、借手持比丘（東寔）焚此妙香、供養十方諸仏三界万靈、以伸功德之儀。夫此香者非世間質礙香也。所謂五分法身是也。地獄餓鬼依之拔苦飽滿、畜生修羅依之發智解頤、人天兩道依之脫八苦免五衰。聞香功德大哉。（東寔）亦賦伽陀一篇、聊加贊揚、強涉言詮者也。

水在碧潭月在天 水天一色月無辺 夜來開顯光明藏 照破三千与大千 喝一喝。

前往当山勅諭大天法鑑禪師嶺南和尚入牌祖堂之法語

恭惟前住当山勅諡大天法鑑禪師嶺南大和尚大心中興主盟、東漸開闢始祖。得法洛西之地、撥軫向上機閑。盛化海東之辺、開示一条活路。道德兼備、兒孫軫多。潤色宗門如雨溼国土。洞明心地似月照虚空。白滴々清寥寥、峭巍々孤迴々。祖道永伝千万世、誰不瞻仰。師号遠降自九重天、人所帰敬。平生受用事々無碍、未後付属一々分明。者箇是大天法鑑禪師尋常行履处。即今帰家穩坐底一句作麼生道。

(拳牌云)炎天梅蕊氣如春 竹雨松風涼意新 三友堂中功第一 暗香不動旧精神 喝一喝。

雲竜和尚入祖堂之法語(太原·大輝·瑤林·雲竜)

雲竜变化起風雨、次作人間六月涼。利物度生畢於此。巍々坐断涅槃堂。恭惟、前住当山雲竜和尚大禪師出現季世、併吞諸方。或時孤峯頂上嘯月眠雲、不干浮世穿鑿。或時十字街頭施泥帶水、不失真正拳揚。法宝信手拈出、全機随处斉彰。仏祖不伝、舐者舐苦者苦。理事無碍、短者短長者長。去却人我担子則安眠高臥。運出自己家珍則全提商量。振起太原宗風。明心見性、流通靈雲派脈。統焰聯芳、往年密々付属。到今的々承当。此故孫枝子葉軫繁茂、支流余裔不覆藏。如上草索子即是雲竜和尚一生受容底閑伎倆也。即今安牌不動处、如何定封疆。

看々夜深明月照靈牀 喝一喝。

太花和尚祖堂入牌之香語

前住当山第百四世太花仞和尚大禪師、吾道木鐸、宗門棟梁。匪啻声価重一世、矧又威風遺片岡。顧子念孫老婆親切、尽參禪秘訣。匡徒領衆聖胎長養、施換骨靈方。將謂私通車馬。元来不露鋒鋦、橫按三尺竜泉。截断衆流、全機広漠、鷄拈一条兎角。打破虚空、意氣堂々。欺瞞德橋木上座、罵倒臨濟金剛王。漲蜀江八千於舌頭、并瀾肆口、併吞天下。聳須弥百億於鼻孔、孤峯安眠、把定封疆。至于是非已去、人境俱忘。前未了後未了、好商量

没商量。惜哉俄然捲法旆於風雨。寂爾瘞隻履於霜雪。即今不耐追悼、聊唱伽陀一章。

翻身踏断涅槃路 六十余年夢一場

(拳牌二五) 写出牌中数箇字 空教硯滴濺肝腸 喝一喝。

乾外和尚入牌之語(景堂・明叔・希庵・梅心・松隱・乾外)

禅源一滴淬竜泉、殺活臨時仏与仙。滅却頂門正法眼、乾坤不盡月無辺。夫惟、前住当山乾外和尚大禅師、論行脚十年功則杖頭挑日月、消浮世半月閨則鍋内煮山川。現成公案大悟廓然、扶豎臨濟正宗。三喝四喝、崖崩石裂。具足槃山大用、一棒兩棒地転天旋。小根劣機相見十万、後生晚進倒退三千。直推正法輪、転処実空三際。高懸大円鏡、分外普耀八埏。有無照破、起居安全。作畧通方、自受用他受用。動容揚古、行亦禅、坐亦禅。闕爾道無別道。自然玄無別玄。此故無認内清浄外清浄、況亦好因縁悪因縁。到這裏鉄壁銀山通線路。風花雪月任流伝。這箇且措。即今別有殿裡底之一着子。聴取山僧普皆宣(不可以言宣)。

(拳牌二五) 懸払休槌寂無事 那伽定裡打安眠 小祥忘景期来日 蕪徹博山一炷烟 喝一喝。

註 入牌法語の草稿も甲稿・乙稿があるが、丁寧な甲稿に依る。祖寧版は、法系についての雪潭の註を無視するか端折っている。例えば最後の註は「景堂派下、松隱の子」と記すのみだ。また嶺南入牌の中で雪潭が「九重天」の「重」を朱筆で添えているのに祖寧は落していたり、雲竜の「幾繁茂」を「転(ウタタ)繁茂」と朱で訂正しているのに見落としている。朱筆は雪潭の字である。道号記は撮影した写本のみ印行したので、例えば体道(少林寺蔵)や黙庵(長康寺蔵)のものなど寺院所蔵の墨跡にはあたっていない。雪潭も「自賛也道号也夥矣、一々正須咨其人而編之矣(自賛も道号も夥しく、一々は正に其の人に咨つて之を編むべし)」と述べている。印可証明は異常に少なかったため、更に調査させて頂きたい思っている。

[続]